天皇と戦争
（8月のごあいさつ）

平成27年8月1日（土）

全国会議へ出張した折、沖縄から来ましたが東京は暑いですね、と言うと“そのとおり”との答えでした。

最近、作家の保阪正康先生の講演を聴いた。
また、先生の「**昭和天皇実録**その表と裏①」も読ませていただいた。
特に、形容詞を多用する**歴史修正主義**（者）の話を信用してはいけないと話された点は印象的であった。それは、嘘吐きであり、当時の軍が政治をコントロールして、勝つまで続けるという根拠のない暴論へつながるものだとも思った。
太平洋戦争と言えば、やはり第一に心に浮かぶのが**昭和天皇**である。どのような気持で戦争前後をすごされたのかは不明であるが、すべての点について納得の行かない気持が多々ある。

明治憲法において、**日本の主権者は天皇**であり、天皇の名において戦争は行われた。昭和天皇は、何故戦争を選択されたのか。
日本人310万人、アメリカ人41万人、中国人1千万人、その他の国々も1千3百万人を超すとも言われる犠牲者を出した**太平洋戦争**に天皇はどのような自責の念を持たれていたのであろうか。
開戦―昭和16年の開戦前は、いかなる理由があろうとも戦争に反対であり、昭和16年9月の御前会議においては、有名な**明治天皇の和歌**を読みあげ平和を望む気持を発表されている。その後も、**開戦に成算なし**の懐疑的な気持ちは変わらなかったが、12月に入り、**開戦やむなし**との意思を固め開戦を決意される。
経戦―開戦1年後には、**開戦の決定が無謀**だったことに気づき、終戦にもって行こうという意思も持たれるが、軍人たちに、無理である、一度決定したものは歯車を止められないと言われて、続行する。**昭和18年2月ガダルカナル島からの撤退**、そして以降の連戦連敗により日本の敗色は濃くなって行く。**昭和19年10月レイテ沖海戦**に敗れ、日本軍は戦斗能力を喪失した。

終戦―昭和20年に入ると、**近衛文麿元首相の敗戦必至との上奏文**、母である**貞明皇后の天皇批判**なども出るようになり、日本の敗戦は必至となった。4月にはヒトラー自殺、5月独は無条件降伏。**昭和20年7月ポツダム宣言**による無条件降伏の日本への通告。**8月15日に天皇の玉音放送**により終戦へ。

昭和19年の連戦連敗と昭和20年に入っての状況は、何故、日本と天皇はもっと**終戦を早められなかったのか**という疑問がわく。特に、**6月米軍の沖縄上陸**による沖縄住民10数万人の死亡、8月**広島、長崎への原爆投下**の死者30数万人は残念でならない。アメリカ人も戦争の後半には、20万人余の死者を出している。何故、戦争の後半の時点で**終戦の努力**がなされなかったのであろうか。
平成27年7月、**戦後**という言葉自体が**死語**と化しつつある。**現在の政治システム**にはこの**反省**があるのだろうか。